

## 1 経営的特徴と導入方法

ハナモモの需要期は、3月の節句に集中することから、早期出荷のための早期休眠打破は必要としない。需要期が限られること、枝折り技術を要することなどから以前は経営規模に限界があったが、近年は小枝折り束で流通する量が増加し、自動結束機の利用で規模拡大が可能となった。

促成施設は、温湿度管理が難しいので、モモの促成に適した構造の専用温室が望ましい。

表1 10a当たり旬別所要労働時間（単位：時間）

月	1月			2月			3月			4月			5月			6月		
旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
時間				1.5	80.0	80.0							1.5	8.0				

  

7月			8月			9月			10月			11月			12月			合計
上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
	8.0							8.0										187.0

(注) 1. 福岡県経営類型(1996.3)

2. 10,000本/10a

## 2 生理生態的特性と適応性

モモの原産地は中国であり、果樹としてのモモと、観賞用のハナモモに区別される。

ハナモモには、鉢もの用が主となるカラモモなど、庭木用が主となるハウキモモやシダレモモなど、兼用のキクモモなどがある。また、枝もの用としては矢口系の品種かその実生など、枝の伸びがよく、収穫後の枝折り（しおり）作業のしやすい系統が利用されている。ここでは枝物栽培についてのみ記載する。

ハナモモは落葉高木で、4月ほう芽にわずかに先だって開花し、ほう芽した新梢は年間1～2m伸長する。畑作園芸試験場花き科（六戸町）のハナモモ（品種：矢口）の花芽分化期調査（昭和63年）では、9月下旬から分化期に入り、10月上旬にがく片形成期、10月中旬～11月上旬に花弁形成期、11月上旬～下旬に雄ずい形成期、12月上旬から雌ずい形成期がみられ、1月上旬に胚珠形成期に達している。

モモの枝物栽培では収穫できる大きさになると台付けを行い、2～3年ごとにすべての枝を収穫し、促成出荷する。収穫後のモモは台の部分から多数の徒長枝を伸ばし、秋までに1～2mとなる。

この1年生枝は花つきが悪いのでそのまま管理し、2年目の秋～冬に蕾の状況をみて収穫するか、3年目まで待つか決定する。

この間、台付け、病虫害防除、施肥、ほ場管理以外はすべて自然にまかせるため、枝の伸び、蕾の量など品質を左右する要件は降水量や日照量の年間変動に負うところが大きい。

### 3 作型と品種

作 型	年 次	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
露地普通栽培 (切り枝  促成栽培)	1年目	◎											
	2年目												
	3年目	$\Omega$ —加温— $\Omega$ * — * ■ ■ ■ ■											
	4年目												
	5年目	$\Omega$ — $\Omega$ * — * ■ ■ ■ ■											

注) 5年目は以降2～3年ごとに繰り返す

\* — \* : 切り枝収穫期間    ■ ■ : 切り枝促成・出荷期間     : 収穫・出荷期間

#### (1) 作 型

露地で栽培しておいて、3月3日の雛祭りに向けて切り枝を促成出荷する作型が殆どで、2月になると生け花の稽古が始まるので、1月中下旬から促成室を3～4回転させて、需要期の2月に集中して出荷する。

#### (2) 品 種

現在、栽培されている70～80%は「矢口」で、この中に枝の太さが違う系統があり、太矢口、細谷口などの名称がつけられている。

「矢口」: 立性で濃桃色、八重咲き、早咲き。切り花の主要品種である。通常矢口太、矢口中（または中太）、矢口細と区別しているが生産者個々の畑では判然としない例が多い。一般的に、矢口太は花つきはよいが枝折りにくく、矢口細は姿はよいが花つきにむらがあるといわれている。

「寒白」: 立性で純白色、八重咲き、切り花用として用いられる。

「源平」: 立性で白地に紅色が絞り状に入る。一部切り花に用いられている。



品種「矢口」

## 4 栽培

### (1) 苗木の確保

#### ア 購入

ハナモモの苗は接ぎ木1年生の苗を購入するか自家生産を行う。

#### イ 自家苗生産

苗づくりは接ぎ木による。台木は食用の品種の実生苗を利用する。熟期に果実を取り、果肉を洗いとって乾燥しないように土中に埋めておく。翌春3月に播いて育てると1年で台木として使える。接ぎ木は3月上・中旬に切り接ぎをする。また、9月の芽接ぎも簡単にできるので、切り接ぎで活着しなかったものは台木の枝を伸ばしておいて芽接ぎをする。自家苗づくりには芽接ぎのほうが活着率が高いのでよい。

### (2) ほ場選定、定植準備

ア 耕土が深く肥沃な土地では秋の遅伸びがあり、枝先への花芽のつきが荒くなる。逆に耕土が浅いと若木のうちから花付きはよいが、木の寿命は短い。

イ 土壌条件は、沖積土では枝の伸びは遅いが花付きがよく、洪積土壌ではその反対になる。

ウ 過度の乾燥地、湿地は不適である。特に排水不良地や地下水の停滞などによる酸素不足の条件に弱く、土壌通気の良い条件下において生育が良好となる。

エ ハナモモは日照不足に対して敏感な作物で、耐陰性が非常に弱い性質を持つ。日当たりの良い方が生育が盛んで花芽の着生が良く、高品質の枝が生産できる。

オ 以上のことから排水良好で保水力のある日当たりの良いほ場を選ぶ。

### (3) 土壌改良・施肥

ア 植え付ける際には、植え穴を大きく掘り、粗大有機物を多く施して根張りをよくする。ほ場の肥沃度にもよるが、堆肥を全面施肥して耕耘しておき、植え穴を深さ・径とも50cm程度に掘り、粗い堆肥を30～40リットルと化成肥料100g程度施す。

イ ハナモモは吸肥力が強いので、木が大きくなるにつれ増肥する必要がある。おおよその施肥量は10a当たり4～5年生で、窒素12kg、りん酸10kg、加里8kg、10年以上で窒素15kg、りん酸12kg、加里10kgを施す。施肥時期は花芽分化期との関係からも2～3月が適期で、7～8月まで窒素の肥効が残らない配慮をする。

### (4) 定植

ア 定植は秋か春に行う。

イ 植え付け間隔は3～4m×4m程度とする。この場合、初期の収量を上げるため2m×4mとして生育に応じて間引く方法もある。

ウ 苗は根を広げ、接木部分が地上すれすれになるように植える。

エ 定植後、地上70～100cmで幹を切り、支柱を添える。

### (5) 整枝・せん定

ア ハナモモは徒長枝状態の枝を切り枝として用いるため、台付けをする。植え付けと同時に70～100cmで切り戻しておき、第1回目の切り枝（収穫）まで、整枝せん定は行わず放任状態で管理する。第1回目の切り枝は植え付けてから3～4年目に行うが、このときに台付けをする。台付けの高さは除草・施肥などの

管理作業および枝の薬剤散布を考慮して決める。標準的には70～100cmで垂主枝を出し、150cm程度の高さに台付けするのがよい。その場合、台の長さは100cm前後で、台の数が10本程度確保した方が収量が多くなる。

イ 第2回目以降の切り枝時には、同時に不用枝もすべて切り、太い切り口には必ず保護剤を塗っておく。毎年切り枝する場合には6～7月に不用枝の整理をするが、2年に1回の場合は2～3月に整理する。生育の旺盛な場合は5～6月に枝の元をのこや鎌などの刃物でらせん状に2～3周表皮を切り（スクーピング、切皮）、花芽の着生を促す。花芽の着生増進に環状はく皮法もあるが、労力が大変な他、台風害を受けやすくなり実用的でない。

## 5 主要病害虫とその防除対策

### (1) 病 害

発生する病害は果樹類モモと同様と見られるため、的確な診断のもとに県防除基準を参考にして防除する。

### (2) 虫 害

ハマキムシ類、アメリカシロヒトリ等のケムシ類、ハダニ類、コスカシバ等が加害するが、他の害虫も含めて県内では不明な点が多い。

## 6 収穫・促成・調製・出荷

### (1) 休眠と促成時期

山形園試（昭和54年）によると、ハナモモ（品種「矢口」）の休眠は、5℃以下の低温に500時間前後遭遇すると完全に解除されるとしている。

また、畑園試（平成元年）の試験（品種「矢口」）でも12月下旬に切り枝したもので休眠が破れていることがわかっている。したがって、ハナモモの出荷期が2月中～下旬が主になることから、休眠完了期からの促成開始となるため、早期休眠打破は必要としない。

表2 ハナモモの切枝時期と開花率

（平成元年 青森畑園試）

切枝時期	調査月日	花芽分化のステージ 胚珠形成期	5℃以下遭遇時間	花芽数	開花割合 (%)				副梢数	備考
					開花	催色	未催色	枯死		
12.28	1.22	5	724	126	0.0	60.6	39.4	0.0	14.0	落葉後
1.16	2.8	5	1151	132	6.8	50.1	43.1	0.0	14.6	落葉後
1.31	2.17	5	1511	145	5.8	45.3	48.9	0.0	11.4	落葉後
2.15	2.28	5	1836	211	7.7	45.7	46.6	0.0	16.8	落葉後

注) 花芽分化調査は切枝時に5芽調査。切枝長は120cmに調製。品種「矢口」

### (2) 収 穫

切り枝は雪の多い地方は12月末頃から行い、そのまま雪の下に入れておく。雪の少ない地方ではその都度切り出しを行う。

(3) 促成の準備（束づくり）

モモの花芽は作業中に落ちやすいため、ほ場で切り枝するときから十分注意する。このため、用途に合わせた枝折り束にしてから水揚げし、促成室に入室する。枝折りには「生花」用の従来規格（1.0～1.3mの枝2～3本、0.6～0.8mの枝2～3本を1把としてミゴ（稲ワラの穂首）で小枝をまとめ、この小束を48把で1丸として出荷する）と、アレンジや小売り用の丸束（1～1.3mの枝を5～10本一把として自動結束機で何ヶ所か束ね、30把を1丸として段ボールで出荷）、小枝折り（0.7～0.9mの枝を2～3本で1把とし、結束も結束機を利用して省力化し、この束のまま消費者まで届ける方法）の3つがある。

水揚げは作業室など屋内で5～7日行うが、結束の手間の関係から、早くから結束し水揚げを長くして、出荷期を調節する。この場合は水を取り替えながら貯蔵するか、クリザール1000倍液を利用して貯蔵するとよい。

(4) 入室と管理

ハナモモの促成の環境条件でもっとも大切なことは温湿度の変化がないことで、温度は18～22℃を目標に、上限25℃、下限15℃とする。湿度は70～90%で、枝やつぼみがやや湿っている程度の感じで、湿りすぎるとつぼみにカビが出る。この条件にするため、一般のガラス温室であれば内部に別途黒ビニールかシルバービニールで囲いを作って湿度を保ち、この上にムシロなどを覆って温湿度を調整する。専用の促成室であれば外部遮光により日中の温度調節をするので、窓の開閉なく湿度を保つことができる。枝の散水は直接行くと花芽が腐る恐れがあるので、束にコモか紙を巻き、それを濡らすようにする。

水槽や容器の水は枝が腐ることのないように3～4日に1回水を替えるか、クリザールの100倍液を利用する。

促成日数は2月上旬で8～10日、下旬で5～7日である。出荷の2～3日前には夜間5～10℃の冷室に移し、外気にも慣らすが、この時に水を下げて花らいが紫色になることがあるので、急激に冷室に移したり風に当てたりしないようにする。

管理	入室前期	入室後期	出荷期	備考
温度	22～23℃	18～20℃		<ul style="list-style-type: none"> <li>・モモの促成は、暗条件によりほう芽を抑制し、開花率を高めさらに品質向上をするが、花色が淡く鑑賞価値がやや劣る欠点があるので、つぼみが着色しはじめたら徐々に弱い光を与え、花色の発現を促進する。</li> <li>・促成中の水にクリザールを利用するとよい</li> </ul>
日照	専用室は60～80%遮光 一般温室は内部に黒、またはシルバービニール張り			
（シリン当ジリ）	4 2 1	枝に直接かけない		
	促成所要日数 2月下旬：5～7日程度			

(5) 出 荷

どの枝折り方法でも、2～3割開花した状態で出荷する。

**参考・引用文献**

- 1) 榊原功、「農業技術体系 花卉編 11 花木、観葉植物」、農山漁村文化協会（平成6年）
- 2) 花岡喜重、「新特産シリーズ -枝物-」、農山漁村文化協会（平成10年）
- 3) 山形園試、福島園試いわき支場、宮城園試、「寒冷地における枝物花木の栽培と促成技術の確立」（総合助成試験成果）（昭和56年）
- 4) 佐藤公一他編、「果樹園芸大辞典」、養賢堂（平成3年）
- 5) 榊原功、「切り花栽培技術マニュアル」、誠文堂新光社（平成4年）

